中世ペルシア語の付属代名詞

野　田　恵　剛

0. はじめに
1. かたち
2. 前接性
3. 機　能
4. あらわれる位置
5. 自由形と付属形の関係
6. 近世ペルシア語との比較

0. はじめに

中世ペルシア語（以下MP）[1]の代名詞は自由形（free form）と付属形（bound form）のふたつにわかれる。この区別は印欧語のみならず，アラビア語，スワヒリ語，オーストラリア原住民語（Dixon 1980：362f.）にもみられ，世界の諸言語にかなりひろくみられる現象のようである。そしてこの区別はペルシア語史をつうじていずれの時期にもみとめることができる。

MP の付属代名詞についてはすでに，Boyce (1964), Rastorgueva (1966：67f.), Brunner (1977：97f.) などの研究があって，事実はほとんどでつくしている。拙論はマニ教中世ペルシア語（以下 MMP）にもとづいて，BP の特徴を簡単にまとめてみようとするものである。

1. かたち

MMP の自由代名詞（以下 FP）と付属代名詞（BP）は人称と数のハンチュウをもち，つぎのようなかたちをもつ。

	1人称・単数	2人称・単数	3人称・単数	1人称・複数	2人称・複数	3人称・複数
FP	an/man	tō	ōy	amā	ašmā	awēšān
BP	-(u)m	-(u)t	-(u)š	-(u)mān	-(u)tān	-(u)šān

MMP はセム語起源の文字をもって表記されているので，母音，特に短母音の表記が不十分であり，したがってうえの転写も概略的なもので厳密なものではない。BP のカッコのなかにいれた母音は子音でおわる語につづく場合に挿入されるものである。しかしこの母音は，たとえば，c'wn=cōn「…の時に，…のように」につづくときにも，cwn-wm (be 1)[2], c'wn-yš (aq 2) のように -w-, -y- 両方の表記があり，しかも br'zyst-wš (cu 40) のような例もあって，-š のまえでかならず -y- で表記されるわけでもない。したがってこのつなぎ母音の音価の決定は容易でない[3]。

2. 前　接　性

MP の BP はふつう先行する語につづけてかかれる。この事実はそのまま，この系列の代名詞が，自由形式でなくて付属形式であり，独立しては発音されず，音韻論的には先行する語（成分）の1部をなしているということをあらわしているものと解することができる。しかも「先行」する語（成分）と連書されるということは，この BP が前接的（enclitic）であるということを意味する。そしてこの前接性は，そのほかの屈折形態素および派生形態素のあらわれ方と軌を一にしていることも注目されてよい。すなわち，複数接辞 -ān，動詞の現在幹より抽象名詞を派生する -išn，[4] 形容詞より抽象名詞を派生する -ī(h) などすべていわば「前接的」（＝接尾的）である。たとえば，

merd「おとこ」　merd-ān「おとこたち」

kun-「おこなう」　kun-išn「おこない，活動」

rōšn「あかるい」　rōšn-īh「あかるさ，光明」

ただ BP とこれらの接辞のあいだには分布上の差がある。後者は一般に特定の語類（品詞）としか結合しないのに対し，BP は可能なかぎり，どの語類に接続してもよい。たとえば，複数接辞 -ān は名詞または形容詞としか結合せず，-išn は動詞の現在幹と，-ī(h) は形容詞としかむすびつかない。一方，BP は以下にみるように，接続詞（u- 'and', cōn 'how, as' など），関係詞（kē, ī），動詞，名詞などと結合している。

3. 機　　能

MMP の BP には次のような機能がみられる。以下はその実例である。

a. 直接目的語

（1） cōn-um　bannagān　xīrēd　az　tāyān (be 1)「(かれは) 奴隷のようにわ
のように—1単　奴隷たち　買う—3単現　から　盗賊たち

たしを盗賊どもから買う」

（2） padīr-uš　pad　frī (cq 2)「愛情をもってそれをうけとれ」
うけとれ—3単　もって　愛

（3） u-t-išān　kird　āzād　az　ērdast　ī　dēswēs (cd 4)「あなた
そして—2単—3複　なした　自由な　から　手下　関係詞　混合

は彼らを混合の手下から自由にした」

b. 間接目的語[5]

（4） u-tān ... diyānd　šādīh (be 5)「あなたがたに（かれらが）よろこびをあたえる
そして—2複　あたえる—3複接　よろこび

ように」

（5） u-šān　xwad　dar　ī　uzēnišn　bawēd (a 3)[6]「かれら自身に救済のとび
そして—3複　自身　とびら　関係詞　救済　ある—3単現

らがあるでしょう」

(6) u-mān　xwad　frēstānd　zōr　ud　frayādišn (cu 26)「(彼ら) 自身わ
そして—1複　自身　おくる—3複接　力　と　たすけ

れらに力と援助をおくるように」

c. 属格関係

(7) u-m　tanwār (be 14)「わたしの体」
そして—1単　体

(8) cihr-um　bāmēw (da 1)「わたしのかがやく姿よ」
姿—1単　かがやく

(9) hirz-um　āstār (cu 14)「わたしのつみを許せ」
許せ—1単　つみ

(10) u-š　pad　zōr (b 1)「かれの力によって」
そして—3単　によって　力

d. 他動詞文の主語

(11) u-mān　nē　bōxt　hē (Šb 116)「われわれはあなたをすくわなかった」
そして—1複　否定　すくう　助2単

(12) xīndag　būd　hem　u-tān　drīst　kird　hem (Šb 79)「わたしは病
病気の　である　助1単　そして—2複　健康な　する　助1単

気であり，あなたがたはわたしをなおしてくれた」

(13) dīdēm　brāzāg　ī-t　pad　sar　winnārd (cu 33)「あなたがあたまのう
王冠　かがやく　関係詞—2単　に　あたま　おく

えにのせたかがやく王冠」

e. 前置詞の目的語

(14) u-m　nūn-iz　xwad　abāg　rawēd (b 1)「いまもかれ自身わたしとゆく」
そして—1単　いま—も　自身　ともに　ゆく—3単現

(15) bān　ud　frēstagān　ī-t　abāg　āmad　hēnd (cu 33)「あなたとと
神々　と　天使ら　関係詞—2単　とともに　来る　助3複

もにきた神々や天使ら」

(16) u-šān　hān　bām ... dīd　u-šān　awiš　ruzdist (M7981 I Rii 25-7)
そして—3複　あの　かがやき　みる　そして—3複　それに　欲する

「かれらはそのかがやきをみて，それを欲した」

f. 再説（前方照応）[7]

(17) abārīg-iz　xrad　ud　brahm ... man　padiš　sust　hem (Brunner
その他の—も　教え　と　道徳　1単　それにおいて　しまりがない　である—1単

1977 : 111)「他のおしえや道徳…わたしは…それにおいてもしまりがない」

(18) dibīr　kē-š　niwist　nibištan (s 2)「かきはじめた書記」
書記　関係詞—3単　はじめた　かく

(19) ēn ast uzdēscār ī-š xwānēnd kadag īg yazdān (dl 5)
これ である—3単現 偶像神殿 関係詞—3単 よぶ—3複現 家 関係詞 神々

「これは，(人々が) 神々の家とよぶ偶像神殿だ」

(20) tō hē ... diyāg ī wispān kirbagīhān ō frazendān kē-t
あなた である—2単 与えるもの 関係詞 すべての 功徳 に 子どもら 関係詞—2単

awiš payōsēnd (Brunner 1977 : 112) 「あなたは，あなたをもとめる子供らにすべ
(それ)に のぞむ—3複現

ての功徳をあたえるものである」

BP にはおおざっぱにいって，以上のような機能をみとめることができる。(M) MP の BP の大きな特徴は自動詞文の主語 (S) になりえない，つまり，いわゆる「斜格的」(obliqne) なはたらきしかないことである。

うえの a～f の機能は，d をのぞいて，テンスとは無関係に，現在，過去いずれにおいてもみられる。d の機能は能格構文で他動詞文の主語 (A) としてはたらく場合で，過去および過去幹にもとづくテンスにしかない。[8] さらにこの能格構文では，他動詞文の目的語 (O) は義務的に助動詞にコードされるので BP(または FP) であらわす必要がなく，したがって過去時では BP が O として機能する例はすくない。たとえば，

u-tān paymōxt hem「あなた方はわたしに服をきせた」
そして—2複 服をきせる 助1単

においては，助動詞の hem が O をあらわす結果となっている。[9]

4. あらわれる位置

FP は文のどの位置にもあらわれる。これに対し，うえの例にみられるように，BP は文または節の最初の単語もしくは成分のすぐうしろにあらわれる。[10] BP が接続する語はさまざまであるが Šābuhragān についてみると (MacKenzie 1980 : 301-10) つぎのようになっている。[11]

ud「そして」55回，ēg「それから」3回，ī(g) 関係詞，1回，bēz「しかし」2回 (ky-byc-wš'n をふくむ)，cōn「のように」1回，gahē「それから」2回，hān「あれ」6回，kū「ということ」2回，merd「おとこ」1回。

これから明らかなことは，BP はできるだけいわゆる「語彙的単語」をさけて，「文法的単語」につく傾向があるということである。そして主文では，元来「そして」を意味した u- が BP のにない手となっている。(M) MP では u- が頻出する —Šābuhragān でも圧倒的におおい— が，BP とむすびついた u- は多くの場合「そして」の意味はもっておらず触媒 (catalyst) の役しかはたしていないことは注目すべきである。[12] また従属文はたいてい従属接続詞にみちびかれるので，当然 BP はこれに接続する。

したがって，BP のあらわれ方にかんして，われわれはつぎのようにまとめることができる：

BP は文(節)頭の語に接続し，その語はできるだけ「文法的」(＝非語彙的) でなければならない。

これによって，たとえば，「わたしが犬をみた」がふつう u-m sag dīd であって，*sag-um dīd でないことの理由を説明できるようにおもわれる。Brunner(1977：97-115) は BP を，なにに接続するかによって分類しているが，このようにみると，そのやり方はあまり有効とはいえないようである。上例の (8)，(9) で BP が名詞や動詞に接続しているのは，実は，例外というべきで，これはおそらく (8)，(9) が韻文であるということと関連し，韻律上の制約から無意味な u- が排除され，そのため語彙的な cihr や hirz についたとみた方がよい。

こうした韻文の場合をのぞき，BP の生起制限はかなり厳密にまもられたが，わずかに例外がある。前置詞の目的語が BP のばあい，当然 BP の方が先行するので，その名に反し，後置詞のようになった。しかし前置詞の az「から」，pad「によって，のなかで」，ō「に」は例外で BP が直接接続し，aziš, padiš, awiš (または ōyiš) のようになった。これはこの3つ (まれに abāg「とともに」も，Brunner 1977：110 参照) が単音節であることと関連があるようである (Boyce 1964：51)。そしてこの前置詞＋BP の結合は3つの下位的機能をもつ。第1は，BP が指示的機能をもち (むしろ「たもち」というべきか)，たとえば awiš が「かれ，それに」を意味する場合 (例文(16)参照)。第2は，話題化された名詞をもういちど BP で再説する場合で，f の (17)～(19) はすべてこれにあたる。[13] 第3は，たとえば awiš の -iš が指示的機能をうしなって前置詞の一部になり，さらに他の BP や名詞を支配する場合 (例文(20)参照)。

Brunner (1977：99-100) の指摘したように，BP が連続してあらわれる場合にはそのあらわれ方につぎのハイアラーキーがある。

1人称＞2人称＞3人称

つまり，2つの BP が連続してあらわれる時，左側の人称の方が先にあらわれるというものである。これは一見 Silverstein (1976) の動作主性 (Agentivity) のハイアラーキーをおもいおこさせるが，MP の場合，その機能 (たとえば，A であるかどうか) とは無関係にこのハイアラーキーは成立し，たとえば

u-m-it　　ašnūd　wāng (Brunner 1977：97)[14]「あなたはわたしの声をきいた」
そして—1単—2単 きく　声

では，1人称単数の -m- は A でないけれども2人称単数の(A である)-it に先行している。[15]

5. 自由形と付属形の関係

§1 でわかるように1人称単数の man と -m，2人称単数の tō と -t のあいだには明らかに形態的関係があり，これは歴史的なものである。つまり man は OP mana に，-m は OP -mai に，tō はOP *tava[16] に，-t は OP -tai にさかのぼる。3人称単数 -š は OP -šai にさかのぼ

るが，FP の ōy は指示詞 avahya にさかのぼるとかんがえられ，3人称単数では FP と BP の間には，共時的にも通時的にも形態的なつながりはない。

さらに BP の複数形は単数接辞 -ān 付加することによって形成される。しかし OP では，

	単 数	複 数
1人数	OP -mai	Av. nō, nə
2人称	OP -tai	Av. vō, və
3人称	OP -šai	OP -šām

にみられるように，1・2人称の単数と複数のあいだには何ら形態上の相関はなく，MP の単数形と複数形の相関は，OP から MP にいたる過程での再構造化の結果とかんがえられる。[17] BP には §3 の a～f の機能をみとめることができるが，FP は，特に単独ではこれらすべてに対応する機能があるわけではない。いま2人称単数 tō を例にとり，両方の用法を対応表でしめすとつぎのようになる。

BP	a	b	c	d	e	f
FP	(ō) tō	ō tō	ī tō	tō	pad tō	なし

すなわち，ここでは FP は BP よりもかなり用法がせまく，回説的表現にたよらなければ BP であらわされた機能を表現できない。BP と FP の決定的な差はつぎにみられる。

		A	O	S
FP	現在	ある	ある	ある
	過去	ある	ある	ある

		A	O	S
BP	現在	ない	ある	ない
	過去	ある	ある	ない

つまり，FP がいずれのテンスでも A, O, S すべての機能をもつのに対し，BP は現在で A と S の，過去で S の機能を欠くのである。(この点に関しては FP の方が用法がひろいことに注意)。

FP と BP の関係についてはさらに注目すべきことがある。次の Šābuhragān (77-85) の一節をみよ。

cē	suyag	ud	tišnag	būd	hem	ud	ašmā	xwār	ud
というのは	空腹な	そして	渇いた	である	助1単	そして	2複	食	

bār	dād.	brahnag	būd	hem	u-tān	paymöxt	hem.	xīndag
物	あたえる	はだかの	である	助1単	そして—2複	ふくをきせる	助1単	病気の

būd	hem	u-tān	drīst	kīrd	hem.	bastag	būd	hem
である	助1単	そして—2複	健康な	する	助1単	しばられた	である	助1単

u-tān	wišād	hem.	wardag	būd	hem	u-tān	bōxt	hem
そして—2複	解きはなつ	助1単	捕りょ	である	助1単	そして—2複	すくう	助1単

ud	uzdeh	ud	kārdāg	būd	hem	u-tān	ō	kadag	harruft hem
そして	追放された	そして	放浪者	である	助1単	そして—2複	に	家	あつめる 助1単

「というのは，わたしは飢え，渇いていたがあなた方は食物をくれた。わたしははだかだったが，あなた方は服をきせてくれた。わたしは病気だったが，あなた方はなおしてくれた。わたしはしばられていたが，あなた方は解き放ってくれた。わたしはとらわれの身だったが，あなた方はすくってくれた。わたしは追放され放浪者だったが，あなたは家によんで（直訳：あつめて）くれた」

ここでは A がまず ašmā であらわされ，以下ではそれが BP の -tān で言及されている。つまり，ふつう名詞と代名詞の間にみられる照応関係が FP と BP の間にみられるわけで，FP (ašmā) が BP (-tān) の先行詞になっているという点で後者の方が前方照応性がたかいといえる。

6. 近世ペルシア語との比較

MP と NP をくらべて BP の大きな差は，その生起する環境の差である。すなわち，MP では上述のように原則として文頭または節頭の語にしかも文法的語につくのに対し，NP では文中での位置はきまっておらず，たいてい名詞につく。そしてこの事実は明らかにつぎの機能的な差とむすびついている。

MP における a～f の6つの機能のうち NP（とくに現代ペルシア語）でもっとも一般化したのは c の属格関係をあらわす機能である。その名が示すように，属格関係というのは主として名詞に関係することであり，必然的に名詞との結びつきがつよくなった。そのため現代語ではもはやかつての BP を「付属代名詞」とよぶのは不適切で「所有代名詞」の方がむしろふさわしいほどである。

いま a～f の機能を NP のと対比して示せば以下のようである。

a, b.　文語的には BP ではあらわされないが，口語的（または古体）では BP であらわされることもある。たとえば，dīdam-at「私は君をみた」(Lentz 1958 : 197)。

c.　これがもっとも一般的で，BP によって pedar-am「私の父」とも，FP で pedar-e man ともいえる。

d.　MP の過去時形成の一般法だった能格構文の崩壊とともに A をあらわす機能はうしなわれた。

e.　前置詞と BP は文語的には共起しないが，口語的には例がある。be-š「かれに」など。

f. BP にはもはや再説の機能はなく[18]，人称代名詞や指示詞にとってかわられた。たとえば，
īn hamān mardī-st ke asbī az ū xarīdam「この人が，私がウマをかった人だ」
(Lambton 1967 : 76)

注

1）拙論の略号はつぎのとおり。Av.＝アベスタ語，OP＝古代ペルシア語，MP＝中世ペルシア語，MMP＝マニ教中世ペルシア語，NP＝近世ペルシア語，FP＝自由代名詞，BP＝付属代名詞，S＝自動詞文の主語，A＝他動詞文の主語，O＝他動詞文の目的語。

2）例語または例文のあとのカッコの中のアルファベットと数字は Šb 以外は Boyce(1975) のテキスト番号である。Šb は Šābuhragān の略である。

3）-t にはごくまれだが有声音のバリアントがある。pahikirb-ud huzihrā「あなたの美しいすがたよ」(cu 4) MMP にはこのように，ゾロアスター教系のテキストや NP で無声音があらわれるところに有声音があらわれることがある。たとえば NP tā「…まで」～MMP dā，NP -tar（比較級の接辞）～MMP -dar。ただこの場合の -ud は例外的。

4）āmadišn (h 1)「くること」のように例外的に過去幹につくこともある。

5）namāz-ut barām (cu 14)「わたしはあなたに敬礼します」のように，直接目的語とも間接目的語ともとれるものもある。

6）この文は，所有構文で，-šān は所有者をあらわす。

7）関係節で先行詞を前方照応の代名詞で再説する言語には，アラビア語，ヘブライ語などがあり，MP もその1つ。

8）d の文が「受動文」でなく「能格文」であることについては Noda(1980) をみよ。

9）(3) で O が助動詞でコードされず BP でコードされていることに注意。

10) Brunner (1977 : 97) が，'The suffixes〔＝BP〕tend to occur near the head of a clause but enjoy considerable freedom of position' といっているのは，例にてらしても納得できない。

11) aziš と padiš はふくめない。

12) ジャロ語（オーストラリア）でも BP は catalyst の ŋa に接続する。Tsunoda (1978 : 72) 参照。

13) Brunner (1977 : 111) にパフラビー語からの好例がある。

ardaxšēr	xwarrah	ī	kayān	awiš	rasīd
アルダフシェール	光輪	関係詞	カイの	それに	達する

「アルダフシェールにはカイの光輪が達した」

これは *xarrah ī kayān ō ardaxšēr rasīd の ardaxšēr が話題化によって文頭にでて，もとの名詞を代名詞で再説したもの。

14) これは MP 訳の詩編の例。

15) Boyce (1964 : 49, 1975 : 102＝ar4 の注) の 'when 2 pronouns are suffixed, the agent takes precedence' という発言は修正されるべきだろう。

16) OP にはないが Av にはこの形であらわれる。

17) OP でも3人称の -šai と -šām にはすこし相関がありそうである。

18) 属格関係の場合はわずかに再説の機能がある。たとえば，barādar-am otomobīl-aš xarāb šode ast「兄は車がこわれた」(Amin-Madani & Lutz 1972 : 336) における -aš がそうで，話題化によって文頭にでた barādaram「私の兄」をさしている。

参　考　文　献

Amin-Madani, S. & Lutz, D. 1972. Persische Grammatik. Heidelberg: Julius Groot Verlag.

Boyce, Mary. 1964. Some Persian and Parthian constructions with governed pronouns. Dr. J.M. Unvala memorial volume, 49-56. Bombay.

—. 1975. A reader in Manichaean Middle Persian and Parthian. Acta Iranica 9. Leiden: E.J. Brill.

Brunner, C. 1977. A syntax of Western Middle Iranian. Delmar, New York: Caravan Books.

Dixon, R.M.W. 1980. The languages of Australia. Cambridge: University Press.

Lambton. A.K.S. 1967. Persian grammar. Cambridge: University Press.

Lentz, W. 1958. Das Neupersische. Handbuch der Orientalistik I,IV, 1, 179-221. Leiden-Köln: E.J. Brill.

MacKenzie, D.N. 1980. Mani's *Šābuhragān*-II. BSOAS 43. 288-310.

Noda, K. 1980. Ergativity in Middle Persian. MS. University of Nagoya.

Rastorgueva, V.S. 1966. Srednepersidskij jazyk. Moscow: Nauka.

Silverstein, M. 1976. Hierarchy of features and ergativity. R.M.W. Dixon (ed.), Grammatical categories in Australian languages, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Tsunoda, T. 1978. The Djaru languaage of Kimberley, Western Australia. PhD thesis. Melbourne: Monash University.